

Journal of Chubu University Education

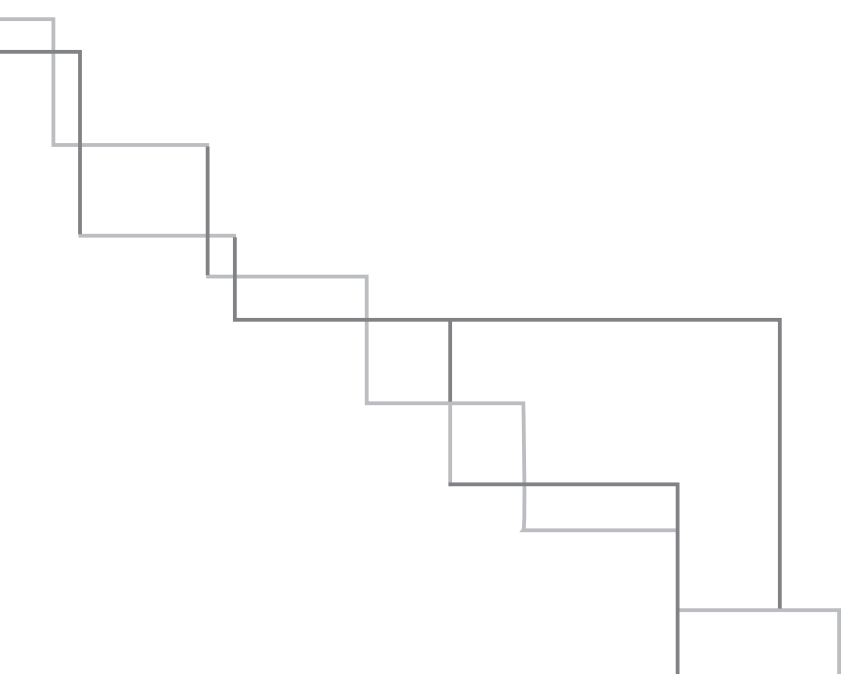
No. 22
2022

【実践研究・実践報告】

2021年度の全学英語教育に関する報告 大門正幸・今村洋美
西村 智・加藤由崇
関山健治・和田珠実

【Practical Report】

A Report on English Education in 2021
..... OHKADO Masayuki, IMAMURA Hiromi,
NISHIMURA Satoshi, KATO Yoshitaka,
SEKIYAMA Kenji, and WADA Tamami



2021年度の全学英語教育に関する報告

大門 正幸^{*1}・今村 洋美^{*1}・西村 智^{*1}・加藤 由崇^{*2}・関山 健治^{*2}・和田 珠実^{*2}

要 旨

全学英語教育科（現人間力創成教育院・語学教育プログラム・英語）では、2010年度に教育理念・方針を策定して以来、それに沿って教育を行い、その成果と課題について本誌で報告してきた。初年次の英語科目である「英語スキルⅠ／Ⅱ」が全て遠隔で行われることになった2020年度については、担当教員を対象に行ったアンケート結果を中心に報告を行ったが、本稿では対面授業が基本となった2021年度について、従来通りの到達度確認テスト・実力テスト・語彙テストの結果について報告する。

キーワード

英語教育、到達度確認テスト、フレッシュマンテスト、実力テスト、語彙テスト

1 はじめに

2011年度の全学共通教育のカリキュラム改訂以来、全学英語教育科（現人間力創成教育院・語学教育プログラム・英語）では全学共通教育科目のスキル教育科目として「英語スキルⅠ／Ⅱ」を実施し、その成果や課題について検討すると同時に、その成果を本誌や学会等で発表してきた（今村・大門，2020、大門他，2010；2011；2012；2014；2015；2016；2017；2018、和田他，2013a；2013b、Imamura et al., 2019、Wada et al., 2014）。2017年度には到達度確認テスト（共通テスト）の改訂を行い、翌2018年度からは改訂版を用いて授業を行っており、同年および2019年度の結果については大門他（2019，2020）で報告し、2017年度までに見られた問題点が概ね改善されたことを報告した。

遠隔授業のため到達度確認テスト等が実施できなかった2020年度については、当該のテストに関する結果を報告することができなかったが（大門他，2021）、2021年度は対面授業が基本となったので、その報告を行いたい。

2 授業の概略と実施したテスト

「英語スキルⅠ／Ⅱ」の受講生は、入学時に行われるフレッシュマンテストの成績によって、上級、中級、初級の3つのレベルに分けられる。教科書および教材は全学英語教育科（現語学教育プログラム・英語）の教育方針に沿ったものである。2011年度と2012年度には既存の教科書を、2013年度からは独自に作成した教科書を使用している。

当初から、学習の到達度を測るために、各学期の最後に、(i) 読解方略（リーディング・ストラテジー）に関する問題、(ii) 文法に関する問題、(iii) 語彙に関する問題、の設問からなる到達度確認テストを実施してきたが、2017年度に改訂を行い、(iii) を秋学期に独立して行う語彙テストとして実施し、各学期の最後に行う到達度確認テストは(i) 読解方略に関する問題と(ii) 文法に関する問題に限定した。また、その内容についても、より応用力を測る問題に改訂した（大門他，2019；2020）。

さらに、秋学期には授業内容とは独立した実力テストを実施し、フレッシュマンテストの成績と比較することで、英語力の変化の確認を行っている。

以下、3節、4節、5節では、それぞれ、到達度確認テストの結果、語彙テストの結果、フレッシュマンテストと実力テストの結果について報告する。遠隔授業となった2020年度はフレッシュマンテスト以外のテストは実施されなかったが、一年間を置いて実施された2021年度の数値が2019年度の数値と変化しているかどうかの比較も行う。6節では、到達度確認テストおよび語彙テストがフレッシュマンテストおよび実力テストとどれくらい相関しているかを検討し、これらのテストがどれだけ受講生の実力を反映しているかという点について確認する。7節は成績に関する報告である。

3 新版到達度確認テストの結果

3.1 春学期

レベル毎の到達度確認テストの結果を表1から表3

*1 人間力創成教育院 語学教育プログラム（英語）教授

*2 人間力創成教育院 語学教育プログラム（英語）准教授

に示す。有効数は初級が73 (2019年度は156)、中級が1904 (2019年度は1731)、上級が251 (2019年度は272)であった。表の一行目における「春方略」「春文法」の部分は新版の到達度確認テストにおける「読解方略問題」および「文法問題」を、またその後の「21」「19」は、それぞれ「2021年度」「2019年度」を指す。2019年度の数値は、大門他 (2020) で報告したものである。また、数値は全て100点満点に換算してある。

なお、2021年度の数値の分析に用いたのは、SPSS Statistics 27 (Mac OS X版) である。

表1 春学期の到達度確認テストの結果 (初級)

	春方略 21	春方略 19	春文法 21	春文法 19
平均	65.6	62.8	50.5	47.9
中央値	65	65	50	50
最頻値	75	65	60	35
標準偏差	12.8	14.1	18.1	16.9
最小値	40	25	15	10
最大値	95	95	80	95

表2 春学期の到達度確認テストの結果 (中級)

	春方略 21	春方略 19	春文法 21	春文法 19
平均	75.8	77.9	64.5	69.0
中央値	75	80	65	70
最頻値	75	85	70	85
標準偏差	13.5	12.7	18.6	17.3
最小値	0	20	0	0
最大値	100	100	100	100

表3 春学期の到達度確認テストの結果 (上級)

	春方略 21	春方略 19	春文法 21	春文法 19
平均	89.2	89.4	85.8	86.6
中央値	90	90	85	90
最頻値	90	95	85	95
標準偏差	7.7	7.4	10.5	9.4
最小値	60	70	40	50
最大値	100	100	100	100

詳細は大門他 (2020) に譲るが、2018年度、2019年度に実施された新版のテストで見られた改善点、すなわち、(i)「零点」の受験者は一部のレベルに限定的である、(ii) 標準偏差の値の差は旧版のテストより少なくなっている、という傾向は続いていた。なお、2019年度の値と比べて初級の数値が高めで中級の数値が低めなのは初級に割り振られた受講生の数が少なく、逆に中級に割り振られた受講生の数が多かったためだと考えられる。

3.2 秋学期

次に秋学期の到達度確認テストの結果を表4から表6に示す。有効数は初級が70 (2019年度は152)、中級が1836 (2019年度は1694)、上級が249 (2019年度は262) であった。数値は全て100点満点に換算したものである。

表4 秋学期の到達度確認テストの結果 (初級)

	秋方略 21	秋方略 19	秋文法 21	秋文法 19
平均	49.2	45.5	47.5	45.9
中央値	50	45	45	45
最頻値	50	50	40	65
標準偏差	14.7	14.6	21.4	19.7
最小値	15	15	5	10
最大値	85	100	85	100

表5 秋学期の到達度確認テストの結果 (中級)

	秋方略 21	秋方略 19	秋文法 21	秋文法 19
平均	64.7	61.7	65.7	65.8
中央値	65	65	65	70
最頻値	70	70	70	70
標準偏差	25.9	16.2	24.7	20.6
最小値	0	5	0	0
最大値	100	100	100	100

表6 秋学期の到達度確認テストの結果 (上級)

	秋方略 21	秋方略 19	秋文法 21	秋文法 19
平均	77.7	77.2	84.6	88.0
中央値	80	75.0	85	90.0
最頻値	80	75	95	90
標準偏差	8.6	8.7	12.0	9.6
最小値	40	50	40	55
最大値	100	100	95	100

春学期よりも全体的に得点が低めなのは、秋学期の問題には春学期の既習内容も含まれるため難易度が上がるからだと考えられる。春学期のテスト結果に関して述べた旧版テストからの改善点2点は今回のテストでも見られた。

平均点は2019年度よりも高い傾向にあるが、得点のばらつきは、特に中級において大きくなっているようである。2019年度と比べて初級の数値が高めなのは春学期と同じ理由だと思われる。一方、中級の数値について文法ではほぼ変わらず、読解方略ではむしろ高めになっている点についてはうまく説明がつかない。この点については今後注視していきたい。

4 語彙テストの結果

2018年度より実施をはじめた語彙テストの結果を表7から表9に示す。有効数は初級67（2019年度は151）、中級1843（2019年度は1687）、上級247（2019年度は262）であった。

表7 語彙テストの結果（初級）

	語彙 2021	語彙 2019
平均	77.0	61.9
中央値	83	60
最頻値	97	73
標準偏差	20.7	20.3
最小値	23	20
最大値	100	100

表8 語彙テストの結果（中級）

	語彙 2021	語彙 2019
平均	75.9	75.0
中央値	80	83
最頻値	93	97
標準偏差	19.2	17.7
最小値	0	13
最大値	100	100

表9 語彙テストの結果（上級）

	語彙 2021	語彙 2019
平均	91.1	92.6
中央値	93	93
最頻値	97	97
標準偏差	8.9	6.9
最小値	33	70
最大値	100	100

2019年度と比べ、初級の数値が高めで中級の数値が低めなのは、春学期の到達度確認テストと同じ理由であると思われる。

5 フレッシュマンテスト・実力テストの結果

新入生は入学時に全員フレッシュマンテストを受けるが、一年次の秋学期、11月末から12月初旬に、二年次のクラス分けの参考資料として、また、入学時からの英語力の変化を測るために、実力テストを受けることになっている¹⁾。このテストは、フレッシュマンテストと比較可能な内容であるため、両テストの得点は、受講生の実力の伸長を知る参考資料として用いている。両テストの数値を表10に示す。

表10 フレッシュマンテストと実力テストの結果

	フレッシュマン N = 2652	実力 N = 2192
平均	56.6	59.1
中央値	58	60
最頻値	64	60
標準偏差	19.0	16.6
最小値	0	16
最大値	100	96

平均点では若干の伸びが見られるが、統計的に有意に差があるかどうかをWilcoxonの符号付き順位和検定を用いて分析した²⁾。その結果、.05の水準で有意であることが分かり、2019年度と同一の傾向が見られた。この点は喜ぶべきであろう。

6 テスト間の相関

2018年度、2019年度の到達度確認テストについては、旧版のものと比べ、フレッシュマンテストや実力テストとの高い相関が見られる傾向にあり、より受講生の実力を反映していることが確認された。この点について確認したところ、表11に示すように、2021年度についても同じ傾向が見られた。

表11 フレッシュマンテスト／実力テストと到達度確認テストとの相関

	フレッシュマン	実力
春の「方略」	.593** (.628**)	.631** (.632**)
春の「文法」	.693** (.711**)	.716** (.715**)
秋の「方略」	.480** (.683**)	.520** (.685**)
秋の「文法」	.621** (.674**)	.643** (.677**)
語彙	.542** (.579**)	.581** (.573**)

** $p < .01$.

括弧内の数値は2019年度のものの

7 成績について

2019年度までは出席率と成績の関係を検討し、単位の取得に至らなかった受講生の大部分は出席回数自体に問題があったことを指摘した。2021年度の成績については教室指定上の問題で出席率データが必ずしも実態を反映したものでないため、成績と出席率の関係に関する正確なデータを提示することができない。したがって、ここでは、それぞれの評価を受けた人数と、それが全体に占める割合（括弧内）のみを示すことにする。また、比較のために、2019年度の数値も合わせて示す（表12）。

表12 それぞれの評価の割合 (春)

成績	2021 春	2019 春	2021 秋	2019 秋
S	260 (10.9%)	373 (16.8%)	312 (13.3%)	233 (10.6%)
A	780 (32.6%)	661 (29.7%)	680 (29.0%)	640 (29.1%)
B	691 (28.9%)	648 (29.1%)	604 (25.7%)	650 (29.6%)
C	519 (21.7%)	426 (19.1%)	597 (25.4%)	538 (24.5%)
E	141 (5.9%)	117 (5.3%)	154 (6.6%)	138 (6.3%)
合計	2,391	2,225	2,347	2,199

2019年度は、秋学期と比べて春学期の方がS評価の受講生の割合が高いのに、2021年度はその逆になっている、A評価の受講生については2021年度の春学期の割合が高く、E評価については2021年度の秋学期の受講生の割合が高い、といった違いがあることは指摘できるが、その理由について考察することは難しい。したがって、ここではデータの提示にとどめておきたい。

8 結語

一年のブランクの後の対面授業実施であったが、概ね2019年度と同じような状況に戻ったと思われる。成績については2019年度以前のような検討はできなかったのは残念であった。今後もデータ収集、分析、検討を重ねて、より良い教育体制の構築を目指していきたい。

謝辞

教育方針の策定、各種テストの実施、その他の運営面でご協力くださった先生方、本報告の内容に関して貴重なコメントを下された先生方、英文要旨に目を通してくださったデイビッド・アレン先生に厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 「実力テスト」は、2012年度までは「プレースメントテスト」と呼ばれていた。
- 2) 非正規分布をなしていたため、ノンパラメトリックな検定を行った。検定方法はSPSSがデータに基づいて自動的に選択したものである。

参考文献

今村洋美・大門正幸 (2020) 「中部大学におけるオンライン全学英語教育の取り組み—教員間連携に焦点をあてて—」 大学英語教育学会第35回中部支部大会

(オンライン開催)での口頭発表。

- 大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明 (2010) 「大学英語教育に関する基本方針について—専門教育機関としての大学における英語教育の在り方を巡って—」 『中部大学教育研究』 10, 23-28.
- 大門正幸・柳朋宏・西村智・野田恵剛・山田伸明 (2011) 「全学英語教育に関する中間報告」 『中部大学教育研究』 11, 87-94.
- 大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・柳朋宏 (2012) 「平成23年度秋学期の全学英語教育に関する報告」 『中部大学教育研究』 12, 81-89.
- 大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・和田珠実 (2014) 「平成25年度の全学英語教育に関する報告」 『中部大学教育研究』 14, 29-37.
- 大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明・和田珠実 (2015) 「平成26年度の全学英語教育に関する報告」 『中部大学教育研究』 15, 65-74.
- 大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実 (2016) 「平成27年度の全学英語教育に関する報告」 『中部大学教育研究』 16, 89-97.
- 大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実 (2017) 「平成28年度の全学英語教育に関する報告」 『中部大学教育研究』 17, 35-44.
- 大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実 (2018) 「2011年度～2017年度の全学英語教育に関するまとめ」 『中部大学教育研究』 18, 1-6.
- 大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・和田珠実 (2019) 「2018年度の全学英語教育に関する報告」 『中部大学教育研究』 19, 1-7.
- 大門正幸・今村洋美・加藤由崇・西村智・野田恵剛・和田珠実 (2020) 「2019年度の全学英語教育に関する報告」 『中部大学教育研究』 20, 31-36.
- 大門正幸・今村洋美・西村智・和田珠実・加藤由崇・中島眞吾 (2021) 「2020年度の全学英語教育に関する報告—オンライン授業への取り組み—」 『中部大学教育研究』 21, 13-20.
- 和田珠実・大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明 (2013a) 「平成24年度の全学英語教育報告」 『中部大学教育研究』 13, 79-85.
- 和田珠実・今村洋美・大門正幸 (2013b) 「中部大学におけるEGAPを意識した全学英語教育カリキュラム改革」 大学英語教育学会第52回国際大会 (於京都大学) での口頭発表.
- Imamura, Hiromi; Wada, Tamami; Ohkado, Masayuki (2019) “Utilizing a Tailor-made Textbook Focusing on EGAP at a Japanese University,” poster presentation at JACET Seminar 2019, Tamagawa University, Japan.

Wada, Tamami; Imamura, Hiromi; Ohkado, Masayuki; and Laurence, David (2014) “An English Education Curriculum Reform Focusing on EGAP at a Japanese University,” oral paper at AILA World Congress 2014, Brisbane, Australia.

A Report on English Education in 2021

OHKADO Masayuki^{*1}, IMAMURA Hiromi^{*1}, NISHIMURA Satoshi^{*1},
KATO Yoshitaka^{*2}, SEKIYAMA Kenji^{*2}, and WADA Tamami^{*2}

*1 Professor, Language Education Program (English), School of General Education, Chubu University

*2 Associate Professor, Language Education Program (English), School of General Education, Chubu University

Abstract

Since 2011, the division of English Education (Language Education Program, English, School of General Education) has been providing education based on the newly established policy as in reported in Ohkado et al. (2010). We had also been reporting the results of the new curriculum as measured by the combination of two existing tests and two newly created tests: the freshman test and the proficiency test; and the achievement test and the vocabulary test. This practice was discontinued in 2020 because relevant classes were all held online due to the spread of COVID-19 and the tests were not conducted in the regular fashion. However, face-to-face classes were re-established in 2021 and almost all the classes were conducted as before. In this paper, we report the results of the above-mentioned tests and see if there are notable differences between the results in 2021 and those in 2019.

Key words

English Education, Achievement Test, Freshman Test, Proficiency Test, Vocabulary Test